



合評会報告：デュルケーム／デュルケーム学派研究会著『社会学の基本 デュルケームの論点』（二〇二一年、学文社）を読む

白鳥，義彦

(Citation)

社会学雑誌, 38:261-262

(Issue Date)

2021-07-31

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/E0042504>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/E0042504>



合評会報告

——デュルケーム／デュルケーム学派研究会著『社会学の基本 デュルケームの論点』（二〇二一年、学文社）を読む——

白 鳥 義 彦

神戸大学大学院人文学部研究科教授

神戸大学文学部社会学研究室における私の前任者である大野道邦先生が中心となって二〇〇〇年に立ち上げられたデュルケーム／デュルケーム学派研究会の二〇年間の活動、ならびに同研究会を母体とする科研費「社会学のディシプリン再生はいかにして可能か——デュルケーム社会学を事例として——」（基盤研究（B）、研究代表者 中島道男、二〇一五年度～二〇一八年度）の成果として、二〇二一年一月に『社会学の基本 デュルケームの論点』（デュルケーム／デュルケーム学派研究会著、中島道男・岡崎宏樹・小川伸彦・山田陽子編、学文社）が刊行された（デュルケーム／デュルケーム学派研究会については <http://fjosh524in.coocan.jp/durkheimian/index.htm> を、また同科研については <http://fjosh524in.coocan.jp/>

*discipline/*を参照）。*Penser avec Émile Durkheim: Les fondements de la sociologie* というフランス語タイトルも付された本書は、デュルケームの論点を四三の命題によって紹介しようという試みであり、デュルケーム本人の著作からの命題に加え、その学派や同時代の思想家そして批判や継承にかかわる命題もふくめて多角的にデュルケームに迫るうとする、いわば「旅のガイドブック」である（中島道男による「まえがき」から、p.1）。本書は、Ⅰ 社会と人間への視座（六命題）、Ⅱ 分業・連帯・社会病理（六命題）、Ⅲ 道德・家族・教育・政治（八命題）、Ⅳ 聖なるものと集合表象（六命題）、Ⅴ デュルケーム学派と同時代の思想家（六命題）、Ⅵ 批判と継承（五命題）、Ⅶ 現代社会学への影響（六命題）という七部に分けられた四三の命題と、まえがき、導入に

あたる「エミール・デュルケムとは誰か」、三つのコラム、あとがき、文献表、索引によって構成されており（全体で、x+二四九頁）、デュルケムへの、さらにはデュルケムを出発点として社会学そのものへの、立体的な案内となっている。本書には、大野先生の遺稿も収載されている。

本書の刊行を受けて、二〇二一年三月二一日（日）にオンラインで開催された、第四〇回デュルケム／デュルケム学派研究会例会（同会は、年二回の例会を開催している）において、合評会が行われた。以下の二編の書評は、この合評会における報告の内容を原稿にまとめたいただいたものである。合評会に際しては、「トピックのイメージ」として、「・本書の趣旨や構成について／・取上げた命題の妥当性／・個別の項目について…内容や書きぶりの注目点のピックアップ／・全体として『社会学の根本』といえるものになっているか／・教科書としての意義や課題…特に、『デিশプリン再生』という本書刊行のねらいのひとつに照らして／・その他自由に（建設的な批判も大歓迎です）／・寄稿された方…執筆の苦労や工夫」ということが予め示され、共有されていた。合評会では、報告者および参加者によって活発な議論が行われ、大いに盛り上がった。本書のより具体的な内容の紹介および評価については以下の二編の書評に譲るが、これらの書評を

きっかけとして、本書を実際に手に取っていただければとても嬉しく思う。